

II 都市の社交空間：ホテル、倶楽部、バー

大阪は民都と言われる。近世、江戸は武士と政治の街に対して、大坂は町人と商いの街であり、近代以降も商工業分野では主に民中心の経済活動が都市大阪の基盤となった。五代友厚ら在野の経済人によって、都市大阪は発展を遂げた。

21世紀に入ったいま、都市のあり方を巡って、その創造性をいかに高めるかが都市の存亡を左右するといわれる。創造都市論がその代表例といえるだろう。

創造力ある都市には、価値ある人と情報の交流や知的好奇心によって、新たな文化が創造され、発信されていく力を有する。知的価値を支える都市の文化的基盤が都市の社交空間であろう。グランフロント大阪のナレッジキャピタルや六本木ヒルズのアカデミーヒルズなど、新たな都市づくりにおいて、現代的都市社交空間を模索する動きは盛んである。

こうした、人と人との知的交流を支える社交空間は、かつてから存在していた。パリのベル・エポックの象徴ともいえるカフェがピカソ、サルトルのような芸術家や哲学者のたまり場となっていたのは有名な話だ。大阪にもそんな物語が語られる場所がいまも生きている。

業界経済人、財界人が集まる社交倶楽部や業界サロンとしての会館建築が多いのは大阪の特徴だ。**大阪倶楽部**（1924年：片岡建築事務所〔安井武雄〕）、綿業会館（1931年：渡辺節）、**中央電気倶楽部**（1930年：葛野建築事務所〔葛野壮一郎〕）などが大阪の都心には数多く残る。

戦前期、大阪の迎賓館としての国際的近代ホテルである新大阪ホテルを設立したリーガロイヤルホテルは、中之島にある大阪を代表するホテルだ。その一角に**リーチバー**はある。英国の陶芸家バーナード・リーチのアイデアを再現したとされるホテルのメインバーは1965年にオープンしている。そのコンセプトは民藝運動の中心人物、柳宗悦により練られたものという。民藝作品に囲まれた英国バーはいまも昔も大人の社交空間として愛されている。

こうした風格ある社交空間は、街角にもある。その代表格がバーだ。神戸のミルクホールを源流にもつ**堂島サンボアバー**（1955年：設計者不詳）は戦前から営業するスタンディングバーで、今宵も大人の社交場としてにぎわっているはずである。

サードプレイスとしてのカフェの重要性が認識されるようになった現代においても、大阪という都市の創造性の源泉となる社交空間は時代を超えて健在だ。そのバリエーションが民都大阪を特徴づけている。（嘉名光市）



写真上 昭和10年（1935）新大阪ホテル開業披露宴
写真下（左）大阪ロイヤルホテル（昭和40年/1965開業）のロゴマーク
写真下（右）開業当初のリーチバー

（出所 リーガロイヤルホテル70年の歩み）

100 年前に大阪の実業家たちがつくって以来
使われ続けている社交倶楽部

03 大阪倶楽部



現役の倶楽部建築として、全国的にも貴重。19～20 世紀にさまざまな大都市で花開いた倶楽部文化の生き証人だ。会員の社交場としての品格は、趣味の良い外観のまとまりから一目瞭然だが、さらに近づいてみると面白い。前面に並ぶ柱の上には怪獣が乗り、アーチなどには独特の植物文様が展開されているのが分かる。東洋の文明にも関心を抱いた大阪の建築家・安井武雄の個性も息づいた一作だ。(倉方俊輔)

所在地：大阪市中央区今橋 4-4-11
建設年：1924 年
構造・規模：RC 造 4 階、地下 1 階
設 計：片岡建築事務所（安井武雄）

04 中央電気倶楽部

内部見学不可



自分を主体として正しいと考えたことを追いかけていく。そんな自然な自信を備えた建築家が次々に仕事を展開し、1920年代から30年代の大阪建築は第一の黄金期を迎えた。中央電気倶楽部は、そんな動きをリードした葛野壮一郎の設計。堅苦しさに囚われない変化に富んだ意匠を持ち、西天満の大江ビルディングと共に葛野の代表作に挙げられる。電気関係者の社交倶楽部という理念は維持しながら、5階のホールをはじめとして、今では幅広く活用されている。電気倶楽部に冠される「中央」の名称は、東京中心の日本電気協会に反発した関西支部が1913年に分離独立した際、日本の中央であるとして付したものの。ここにも静かな誇りが窺える。(倉方俊輔)

所在地：大阪市北区堂島浜 2-1-25
建設年：1930年
構造・規模：SRC造5階、地下1階
設計：葛野建築事務所（葛野壮一郎）

05 リーチバー（リーガロイヤルホテル）



大大阪が誇る迎賓館として1935年に誕生した新大阪ホテルを源流にもつリーガロイヤルホテルの現ウエストウイングは、1965年に大阪ロイヤルホテルとして建てられた。その際当時の社長が世界的な陶芸家、バーナード・リーチに参画を求めて誕生したのが名門リーチバー。英国のコテージを思わせるシックなインテリアには、ウィンザー調の家具や味のあるレンガ、籐の^{むしろ}蓆などが組み合わされて独特の雰囲気醸し出し、河井寛次郎や濱田庄司など民芸の作家たちの作品がさりげなく置かれている。ホテルは建て替えが予定されているが、大阪の歴史を物語るバーとして、未来に引き継ぎたい空間である。

（高岡伸一）

所在地：大阪市北区中之島5-3-68
建設年：1965年
構造・規模：SRC造、RC造、S造
設計：吉田五十八研究室、竹中工務店
構想：バーナード・リーチ

独自のスタイルを守り続ける
大阪を代表する老舗のスタンディングバー

06 堂島サンボア バー



大阪の街を代表する老舗バーと聞いて、堂島サンボアを最初に思い浮かべる方は多いだろう。のれん分けによって大阪、京都、東京の各地で営業するサンボア系のなかでも、最もクラシックな堂島サンボアは、1934年に中之島の地に創業、戦後焼け野原の残る1947年に堂島へ移ってバラックで再開し、1955年に現在の建物を建てた。スタンディングを基本とした適度にほの暗い木調の空間に、L字型のカウンターに沿って設けられた一点の曇りもない真鍮のバーが輝きを放つ。使い込まれてきた小さな空間に凝縮された濃密な空気は、数限りなくこの場に足を運んできた大阪人たちが育んだ、まさに生きた歴史といえるだろう。(高岡伸一)

所在地：大阪市北区堂島 1-5-40
建設年：1955年
構造・規模：木造2階
設計：不詳